

長崎・松浦皿山窯の操業時期

倉田 芳郎

1

長崎県松浦市は、玄界灘に面する北松随一の都市であり、丁度平戸島と佐賀県伊万里市の真中に当たっている。松浦市の中心をなす志佐町から西へ2 kmほど行くと悪太郎川と称ぶ小さな川がある。この川を南へさかのぼって1 kmばかり、西岸がやや急になったあたりの東岸の斜面に皿山窯は築かれている。この窯の発掘調査の依頼を私が受けたのは1980年春のことで、長崎県の正林護社教主事と松浦市の加椎敏郎社教課長のご来訪を八王子市の拙宅で待ち、こまごまと状況の説明をしていただいた。発掘調査には自ら段取りがあるので、現地の様子を確実に把握し、調査の期間・人的規模を決定することが必要なので、8月にまず予備調査を行うことにし、そのうえで、調査期間・予算などを決めることにした。

私が予備調査の目的で松浦皿山窯に赴いたのは同年8月18日であった。埋まった窯を一見して驚いたことは、窯の位置がよく判る状態だったことである。北向き斜面（悪太郎川の東岸になるのだが、川が曲がりくねっているため、この辺では北向きの斜面になっている）に、蒲鉾状に窯が沈んでいる様子が明確に読みとれるのである。一部には窯の奥壁が下にずれ落ちる形で露出していた。そして、窯の両側は、溝状に窪んでいる。下（北）から見て右側は作業場で左側は山の水を切る溝であろうかと推定された。理由は、右側は緩かな斜面が、かつては開けていたようであるのに



付図1 皿山遺跡周辺図

対し、左側は、急な斜面であり、また、この側の溝の方が深かったからである。従来、近世窯の調査では、物原の調査は省略することが多かった。というより、諸々の条件、つまり予算が少なかったり、調査期間が短かったり、あるいは自然条件が悪かったり、といった障害があったのである。この松浦皿山窯で私が第一に感じたことは、「この窯なら、物原まで調査できる。」ということだった。と同時に、このような、窯本体と周辺の遺存状態なら、比較的新しい窯であろうとも感じたのである。

予備調査では、本体の周囲に試掘溝を入れ、調査範囲の確定に力を注いだ。もちろん、主目的は物原の広さを確認するためだった。しかし、遂に物原らしい痕跡は皆無だった。窯の右側の緩斜面と先刻書いたが、おおよその地形は緩斜面をなしているが、窯の右10mのところまで1～1.5m切り崩されて山路が作られ、さらに右1mばかり落とされて、畠が作られており、原地形が、かなり壊されていることに気付いた。ということは、かつて物原になっていた部分は、すでに無くなっている可能性が大きいということになるのか。その畠の耕作者にお聞きしたところ、畠を手に入れた2代前には、すでに段々畠になっていたというお話だった。しかし、物原が崩されていたなら、崩された土は、近くに棄てられているのが普通であろうから、本調査の時に、かなり広い範囲に試掘溝を入れて調べるべきだと考えた。事実、本調査のおり、ずいぶんと執拗に調査したが、遺物の量は微かであった。また、予備調査で窯周辺から採取した磁器片は、私の勘では、「寛政ごろかな？」という印象であった。

発掘調査では、期間・予算もさることながら、調査の人員構成が最も苦心するところである。これまで、ややもすれば、この種の調査では、考古学研究者のみで調査団を構成してしまう傾向が強いのであるが、かねてから、近世の遺跡を調査するさいは、近世史の研究者を、しかも複数入れるべきであると考えていた。また、絶対年代の決定に、理科学の方法を採り入れるならば、できるかぎり、これまた複数の方法で結果を出してもらうべきだ、と考えていた。

皿山窯の調査では、近世史研究者に関しては、所理喜夫氏（駒沢大学）と、丸山雍成氏（九州大学）のお力を借りることができた。所氏は^{デカク}地方文書の専門家であり、志佐周辺の納税関係・手工業関係・商業関係等の文書を集めていただき、操業時期を知り、窯の性格を知るためのご助力をお願いしたのである。また丸山氏は近世交通史の専門家であり、現在、鍋島藩の産業特に陶磁器関係の政策を研究しつつあり、大いに文書の発掘に期待したのである。

いっぽう理科学の方法による年代決定に関しては、従来から私自身は、「出された年代をそのまま信ずる。」ことには、まだ疑問をもっており、むしろ「資料を提供しますから、より正しい判断が得られる日のために、どうぞお使いください。」という姿勢をもっている。そして、年代決定の実験をされる方達相互のあいだでも論議していただきたい、と考えて

いたので、この窯の調査では、焼けた窯床から計測できる熱残留磁気による年代測定法と、当然出るべき炭からのC₁₄法の2つの方法で年代決定の測定を依頼する心算でいた。

しかし、現実には予定・予想と相反する結果になってしまった。まず文書についていえば、理由は不明ではあるが（ある程度の推測はできるが、この文の主題に無関係であり、かつただの推測になるので省く）、現在松浦市の中心地である志佐町志佐から皿山窯所在地の志佐町白浜免にかけ、さらに西の御厨町に至るまで、全く近世文書が無いのである。所・丸山両氏に、せっかく、調査期間中に連日雪の降る中を歩き回っていただいたのだが、ご迷惑のみおかけすることになってしまった。特に、地方文書を調べあげることのためにお出まし願った所氏には、ただの見学旅行になってしまったのではなかろうか？まことに残念であった。志佐町の東北東5kmの同市今福町では、文書が比較的よく残されており「丙子歳御用留」から、文化年間に営業していた豆腐屋に関する事細かな記載もあったのだが。

理科学的年代測定についても、焚口・窯内・煙出部に全く炭の痕跡が無く、灰原も削平されたためであろう、炭層が無かったため、C₁₄による年代測定が不能となり、熱残留磁気による測定を広岡公夫氏（富山大学）に依頼するに留まった。

皿山窯の調査を了えて、最も気に懸ることは、報告で述べてあるような、上室に行くにしたがって、極端に室幅が扇型に広がる平面形をもつ窯式が、どのような径路で肥前に入ってきたかということと、この窯の操業年代であった。肥前磁器窯でこのような形態の窯は、まだ発掘例が皆無である。この稿では、残念ながら、操業時期に焦点をおいて述べざるをえない。また、その考えとて、私考であるにすぎない。若い調査主任利部修君他が克明に調査し、作製した報告書としては、たとえ、私のこの稿が誤まりだ、とされても、瑕ついてはならない。

近世窯址の調査というと、考古学研究者間では、関心の薄い時代である。また近世史専門家の間でも、たとえ、産業史を研究領域とする方でも、遺構にまで手を延ばそうとする人は少ないと思う。さらに、陶磁器に焦点を合わせる美術史家の方も、どちらかといえば、名品といわれる作品に関心はあっても、窯址特に雑器を焼成した窯の遺構に目を向けることは、無理といってよいだろう。つまりは、大方の研究者にとって馴染の薄い分野であるので、この稿では、出来るだけ平明に書くつもりである。

2

本窯の予備調査を通じて収集した磁器は印象でいうなら寛政ごろか、と感ぜられた。磁器片の釉の色を見ると、やや濁った色を呈しており、これまで肥前磁器窯の調査に携わったり、見聞きしてきたりした感覚から、比較的古い、いわば、元禄期（1688～1704）よりは、やや新しいか、といった感じであった。いっぽう茶碗の文様には「二重絡網手文」の染付が多く見られた。この文様は、ほぼ寛政期（1789～1801）に出てくる、とされている文様であったから。

前に記したように、発掘調査以前の窯の周辺の地形が、なかなか生々しく、「割合、新しいのではないか。」と感じたことなどからも、「18世紀中ごろとしたいが、寛政期まで下るだろうか。」と思ったのである。この磁器片を抱えて、肥前磁器の著名な研究家の方々のご意見をいただきに廻り歩いた。この道の第一人者とされる永竹威先生・私の恩師であり、有田天狗谷古窯調査の団長であられた三上次男先生・有田焼の鑑定家でもあり、文書研究家でもある池田忠一先生等々、10人ほどの方々を訪れた。大概のご意見は、やはり、寛政ごろではないか、ということであった。そして、1981年2月から3月にかけて実施した発掘調査期間の前半まで、ずっと、18世紀末の寛政期近辺に操業した窯であろうという先入観念をもち続けていた。調査期間中に出土した、天目茶碗・笹絵等も、別段、私の考えを否定する資料では無かった。

3

遺跡の調査にさいして、周辺の同類の遺跡を見て回る—このことは発掘調査の常道である。私たちは、松浦市志佐町の西方約10kmの田平町に城山窯址を見学に行った。大正12年から昭和初期にかけて操業していたというこの窯は、5室を遺存する登窯で、天井もきちんと残されていた。その状態は、往時を彷彿させるといってもよいようであった。また、ある雨の日、現場の調査は休みだったが、利部主任をはじめとする学生諸君は、わが松浦皿山窯の南西10kmの場所にある佐々町市ノ瀬窯址の見学に行った。この窯は昭和25年に長崎県史蹟に指定された窯である。皿山とよばれ、かつては、この操業者でもあった福本家の系図は、操業期間の家系を詳細に記している。その系図によると、その操業期間は、宝暦元年（1751）から文政8年（1825）であることが判っている。肥前三川内系の窯である。また、瀬戸での磁器生産の祖加藤民吉が修業した窯でもあるので、瀬戸陶磁史の諸書にも記載されている。

利部主任らが見学に行った時、市ノ瀬窯の周辺には、磁器片が散乱していたので、数片の磁器片を収集してきた。その磁器片を見て驚いたのは、そこに「二重絡網手文」の茶碗片があったことである（Pl. 18—2）。そのうえ、器形・高台の作行等、松浦皿山に酷似していたのである。どうみても、市ノ瀬皿山窯と松浦皿山窯は、地理的にも近いし、技術的に関連があると考えられた。ただ違う点は、松浦皿山窯で出土する磁器片は全て黝白色に濁った色調であるのに、市ノ瀬窯出土の磁器片は、濁った色合の製品もあるが、「二重絡網手文」を含め、純白に近い釉色を示す例がほとんどであり、19世紀に入ってから作品とみてよい、と思えた。そこで考えられることは、市ノ瀬窯で焼成に携っていた工人が志佐に移され、あるいは移り、松浦皿山窯で築窯・生産を始めたが、純白の製品を作り出すことが難かしく、短期間で廃窯になったのではなかろうか、ということである。そして、その時期は、市ノ瀬窯の74年間の焼造期間のうちでも、他の市ノ瀬窯生産品との比較から、末期に属するのではないかと感じた。発掘調査の未だ行われていない窯で、層位的知見は

皆無であるから「感じ」で云うだけであるが、白色が、現代物のようによく出ている点からも、年代巾をもたせても、文化・文政期（1804～1830）に当ててよいように考える。つまり、松浦皿山窯製品の濁った色調は、古いためではなく、未熟だったためだと考えられるのである。また、なぜ志佐に一窯が築かれるに至ったかについては、後日、なんらかの関係文書が出てきたおり、所・丸山氏らの手によって解明されるかもしれない。

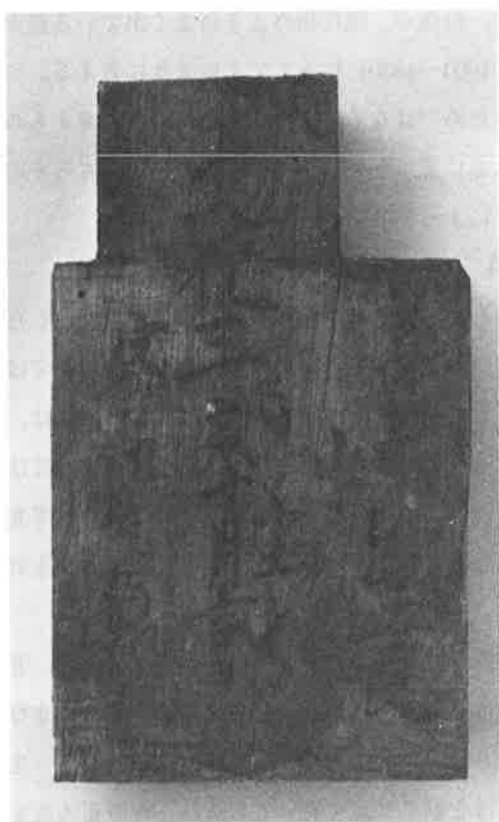
4

松浦皿山窯の出土遺物のうち、特異な資料として瓦が挙げられる。Fig.17-2に示した平瓦である。本平瓦の実測図の常識として、いちおう凹面を上、凸面を下に図示してはある。しかし、実際には、どちらの面を上にして使用したかは不明である。この平瓦は、第1・4・5焼成室の奥壁近い床面に、横1例に敷き並べた状態で出土した。焼成時には、瓦列の上に、さらに砂を敷いてトチンを立て並べて磁器を焼いたと考えられる。この平瓦は、標準的な寸法の1枚を見ると、向巾手前巾とも24.2cm・長28cm・厚1.2～1.6cmを計る。一見したところ、古いという印象は無い。

この瓦の出自を求めることで、窯の操業時期を知り得るのではないかと考えてみた。北松での瓦の産地は星鹿^{ホシカ}が最も著名であるという。御厨町市街から玄界灘に突出する小さな星鹿半島の中心地が星鹿町であり、御厨町から約2km北にあたる。星鹿在住の木寺英一先生（前松浦市教育長）のご案内で、つい10年ほど前まで瓦を焼いておられた吉原正人氏を訪れた。吉原氏の御父君が頻りに焼かれた窯は、現在も窯全体が完全な形で遺されていた。また窯の側には仕事場として使われた工作場の建物が建っていて、中には瓦を作る諸々の道具と製品が積まれてあった。時が2月であったせいもあろうが、玄界の波濤の音が激しく聞える、海に近い平地であり、薄暗い工作場はいかにも寒々としていた。同行の利部主任と積まれた瓦を調べていった。機瓦^{カン}（波板瓦）・鬼瓦等とともに、松浦皿山窯で出土したと同巧の本平瓦があった。元来、本平瓦は、丸瓦と組合って、本瓦葺となるべき瓦である、と考えていた私には不思議に思えた。というのは、本平瓦があるにもかかわらず、軒平瓦・軒丸瓦が無いのである。吉原氏にお伺いしたのだが、「まあ、いろいろに使う。」というご返事が返ってきたのである。また、そこにある本平瓦が何時の作品かは不明だという。

本平瓦には本平瓦なりの歴史がある。奈良・平安期の平瓦とは自ら大きさも重さも違う。当然近世でも、時期々々によって違うであろうし、寛政期と幕末では違いが出てくることであろう。松浦皿山窯床面出土瓦と相いた瓦は、ひょっとすると、今でもどこかの家に葺かれているのではなかろうかと考えた。しかし、北松では、ほとんどの旧家が建てかえられていて、100年を越す建物の話は2件しか聞けなかった。

その1件目は御厨町高野免の浦宏氏宅だった。典型的な北松の武家屋敷の体を留めている。浦氏は、たまたま留守で、隣家の金子有利氏にいろいろお訊ねした。金子氏は郷土の



西木場大工 政五良
 山方駕瀨幾三良
 小工 文治
 文化三 丙寅 十月吉日
 家主 吉野新藏

付図2 吉野家天枳銘文

歴史に興味をお持ちの方で、旧家等にも詳しく、浦家について、少なくとも150年は経ている、という。瓦屋根とはいえ、当然葺替えが行われるはずであるから、その点について訊ねたところ、「この辺りでの屋根の葺替えは一家の大事業であり、覚えているのが普通である。明治以降には葺替えは無かったはずである。」というお答えだった。逆算して150年前というと、天保期（1830～1844）あたりになるが、これをもって、天保期の瓦とすることは無理である。しかし、なにかの参考にはなる、と思い、瓦を眺めてみた。棧瓦葺である。しかし、いっぽう本平瓦が使われてもいるのである。凸面を上にして棟に使われている。また熨斗瓦の下に一段外にはみ出した形の台熨斗瓦として用いられている。葺かれている瓦を外すわけにはゆかないので、下に落ちている瓦片をみると、松浦皿山窯出土瓦と、厚み・弯曲は、ほぼ同じとみてよいと考えられた。

その2件目は、御厨町前田免の吉野信夫氏宅の旧宅である。吉野氏宅は昭和52年に旧宅を壊して建替えてしまっているが、そのおりの瓦は庭の隅に一括して積みあげられてあった。その瓦を見てみると、棧瓦が大部分を占めている。このことは、旧宅が棧瓦葺であったことを物語っている。そして、他に棟瓦・鬼瓦とともに本平瓦もあった。しかしその数は少なく、やはり、台熨斗瓦として使用されていたと考えるのが自然である。この本平瓦

の寸法は標準的な一枚をとると、向巾24.7cm・手前巾25cm・長27cm・厚1.7～2cmで皿山窯出土の本平瓦に比べて厚さがやや多いが、おおかたの寸法は似ており、特に向巾と手前巾がほぼ同じだという点は、もともと、本瓦葺用の平瓦として重ねる目的が無く、台熨斗瓦として作製されていると考えられる。この吉野家建替えの時、大黒柱の^{テシボツ}天柵に棟札の役目をはたす銘文が出てきている。中心の年月の部分は、判然としており端の部分は読むのが困難であったが、所理喜夫氏と杉山博先生（駒沢大学）のお力をお借りして読んでいただいた。付図2のとおりである。銘文によって、吉野家の旧宅は文化3年（1806）に建てられたことが判る。窯出土瓦と類似している点から、深い興味をもった。しかし、よくお話をうかがってみると、吉野家の当主吉野信夫氏の祖母きな（明治9年生）さんからの聞き伝えによると、「この家に瓦が上ったのはきなさんが12才の時（明治20年・1887?…数え年として数えて…）である。」という。それ以前の屋根は、藁葺きであったろうとのことだった。同じ形態・同じ機能・同じ大きさの瓦が、どのくらいの期間作られ続けるのかは不明である。けれども、皿山窯操業期を寛政期とすると、100年も同じ瓦が作られ続けたことになる。私には、どうも考え難い。むしろ、皿山窯の操業期は、文化文政期（1804～1830）より、もっと新しくてもよい、と感じたのである。

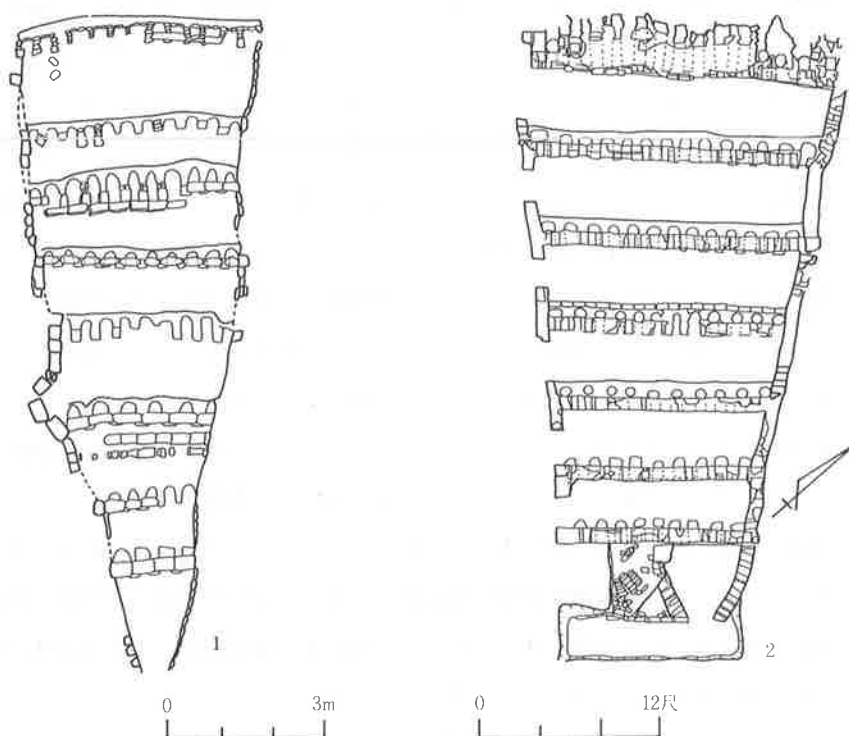
5

この調査の経過の中で、初めに、「寛政よりは新しいのではないか。」と感じたのは、窯の平面形が判明した時点である。第1室から第5室へ、下から上に行くにしたがって、室の横幅が広がっているのである。数字で示せば、

第1室の横幅	3.24m
第2室の横幅	3.68m
第3室の横幅	4.6 m
第4室の横幅	5.34m
第5室の横幅	5.64m

となり、燃烧室から第5焼成室までを上空から見た形は、扇状になっている、といってもよいであろう。これまで私が調査してきた肥前国内の窯址は4遺跡8遺構である。調査回数は少ないが、見学した遺構・報告書等によって得た知見を加えれば、肥後を加えて30基を越えると思う。しかし、そのほとんどの窯は、燃烧室の幅は狭く、第1室はやや幅広く、第2室はさらにやや広く、と、だんだん広がるが、第3室以上になると、幅は3m前後になって、それより広がり続けることは無い。第5室も第6室も同じ幅のまま、10室以上もつながるのである。いわば、上空から見た形は短冊のような形に見えるのである。

この扇形平面形をもつ窯については、調べれば、数が増すであろうが、現状では、申し訳無いことだが、まことに少数例を知るのみである。このことについては、別の機会に調べあげてみる心算であるので寛怒願いたい。



付図3 平面形が扇形の登窯

扇状連房窯にも広がり方に2種類あるようである。その一つは、発掘調査をしている段階では、下の室も上の室も、さほど幅に差が無いように思われながら、実測図を作ってみると、上の室の方が徐々に広がっている、と気づく程度の窯で、佐賀県有田町大絵本にある谷窯などがこの例である（註1）。この窯の熱残留磁器による年代測定結果は、1760年と出ている。いっぽう、窯跡現場で一見して扇状に広がっている窯がある。その実見した扇形連房の磁器焼成窯数例を挙げると次のようになる。想定される操業時間の古い順に記してみる。

佐賀県有田町柿右衛門窯B窯（註2） 有田町教育委員会の調査した窯で、第1室横幅2.1m・第6室4.6m・第15室5.6mと広がっている。しかしこの広がり方は、「やや扇状」とでもいった方がよいかもしれない。熱残留磁気法による測定年代は、1780±30年と出ている。

熊本県天草町高浜窯A窯（註3） 『県報告書48』の第13図によると、焼成室が6室となっているが、図を見ると、**燃焼室**としてある室は、火床・砂床が存在する点と、形状が焼成室と同じである点から、これを第1室とすべきで、焼成室が7室あったのではないかと推定できる。上書P.29の第4表によると各室の横幅は次のようである。

燃焼室（第1室？）	2.8 ～2.92m
第1房（第2室？）	3.4 m

第2房（第3室？）	4.48～4.56m
第3房（第4室？）	4.96m
第4房（第5室？）	5.64～5.72m
第5房（第6室？）	6.2 ～6.24m
第6房（第7室？）	6.64～6.76m

※（ ）内は倉田記

この広がる度合は、松浦皿山窯より広がり大きいともいえる。また、窯を前から（下から）見て左側線が一直線になっていて、右へ右へと広がっている点は松浦皿山に類似している。この窯の構築時期について横尾泰宏氏は、上田家文書から上田家7代の源太夫宜珍の時代に焦点を合せて、享和2年（1802）ごろと考えておられるようであった（註4）。直接横尾氏にお訊ねしたところ、確と時期を決めることはできないが、享和～文化年間（1801～1818）には入るだろうとのご教示を賜わった。

佐賀県有田町柿右衛門窯A窯（註5） 全掘してはいない。全長60mと推定されており、燃焼室に近い室で横幅約2.5m・中央付近で約4m・その上の段が約6mで扇状の窯といってよいだろう。熱残留磁気法によると1810±30年とされている。

磁器窯4窯を上に掲げたが、他に同類の窯には、明治前期の高知県鹿児焼窯（註6）等がある。陶器窯では、私自身、扇形窯を2窯調査している。その一つは、長野県東塩田町の東馬焼窯である（註7）。（付図3—1）林東馬という人が幕末に、美濃から工人を連れてきて開窯したが、明治6・7年ごろに、事業として失敗して閉窯したという。このことは、発掘調査をした1954年に東馬の孫にあたられる林東一郎氏にお聞きした話である。もう一例は、付図3—2の、静岡県上河津沼ノ川B窯である（註8）。ここにはA・B・C3つの煉瓦窯が存在している。1958年の調査であり、調査した窯はB窯で、発掘指揮には加藤晋平氏が当たった。私は数日滞在して加藤氏を援けたにすぎない。A窯は現在も天井がそのまま遺されており、やはり扇形窯の形状を呈している。このA窯の焚口からは、「明治22年5月……」と朱書きした土錘状の煉瓦が出ている。C窯の形態は不明である。調査したB窯が、既述の諸窯と異なる点は、燃焼室が2つあることである。時期は明治に入ってからであろう。そして、この沼ノ川の2窯と長野の東馬窯に共通なことは、左右の窯側線が、ほぼ直線をなしていて、文字通り「扇状」をなしている点である。

明治以降になると、現在遺されている愛知県瀬戸には、この扇形窯は多く認められている。むしろ扇形窯の方が多い、といってよいだろう。そして焚口が複数であることが普通である。

肥前国にあっても、長崎県田平町の城山窯が扇形窯として挙げられる（註9）。大正12年ごろ開窯といわれているが、いっぽう古老の話では、大正初めに開窯したように記憶している、ともいう。田平町の史跡に指定されてはいるが、細かい実測は未完である。本来

は5室あったというが、最上室の第5室は昭和20年代に毀されたという。また燃焼室は、窯前が果樹畑になった時に、これも毀されている。松浦皿山窯調査のうちに計測したところでは、燃焼室奥壁の横幅は5.2m、3室奥壁は6.22m、4室奥壁は8mと扇形を示している。燃焼室の奥壁が5.2mと長いのは、燃焼室が複数であるか、あるいは、焼成室が、下にもう1室あるかのいずれかであろう。

松浦皿山窯を調査していて、「この窯は意外に新しいのではないか。」と直感したのは、私自身が以前に上記の長野・静岡で2つの扇形窯を調査した経験があったからである。また瀬戸で新しい扇形窯を見ていたからである。

この扇形窯がどれほど古くまでもっていけるかと考えれば、柿右衛門B窯の熱残留磁気による測定結果1780±30年をそのまま採用し得たとして、1750年となる。そうしてみれば松浦皿山窯が寛政年間としても、その可能性は充分あることになる。この窯に関して、同窯の報告書のなかで東中川忠美氏は、「18世紀代を中心とする頃と、幅広く考えざるを得ない」といい、さらに「築窯時期については、肥前における窯跡の全体的な構造の変化、それに伴う出土遺物の検討等から、慎重に究明していかなばならないが、遺憾ながら基礎資料の不足のため、比較検討するまでに至っていない。廃絶の時期については、熱残留磁気測定の結果がA窯跡1810年±30年、B窯跡1780年±30年と出されている。これは発掘の結果と矛盾しないが、測定値にかなりの誤差が含まれていることを、十分考慮しておかなければならない」（註10）としている。また、調査責任者である高島忠平氏は、「（柿右衛門）A・B両窯跡は窯の構造・出土遺物からみて、18～19世紀の所産とみられるが、熱残留磁気法の年代測定においても、A窯跡1810年±30年、B窯跡1780年±30年でさしたる矛盾はない」（註11）としている。

確かに、寛政期周辺の窯跡の調査は例が少なく、時期の確定には慎重が必要である。いずれにせよ、柿右衛門B窯廃絶期を1750～1810年の間としてよいとするご両人の意見をそのまま信じたとしても、松浦皿山窯はさらに新しくなることは確かである。皿山窯の形態が、そして機能が、この稿に掲げた諸窯の中で、幕末～明治期の窯に、より相似していることからである。

6

松浦皿山窯の発掘中に市の加椎敏郎社会教育課長から次のようなお話をうかがった。

御厨町在住の志水長吉氏が、「皿山窯は、たぶん、うちの先祖が焼きものを焼いていた窯だ」というのだそうである。そして、その焼きもの師の墓が、悪太郎川のもう少し上流にある。長吉氏は、親から、そういわれているので、盆と彼岸に花と線香を上げて回向をしているとのことである。

皿山窯の操業時期について、私は当初、予備調査のころは寛政期ぐらいに考えていたが、徐々に新しく考えるようになっていた。所・丸山両氏が調査に訪れた時は、ご両人から、

「倉田さんは、だいたい何時ごろと考えているのか。文書を探すといっても、だいたい、どのくらい、と云ってくれないと、探しようがないなあ」と質問された。その時は、「寛政から幕末まで」と、漠然たる答えしかできなかった。心のうちでは、もう「文化から天保まで」と云いたい気持だった。一つには窯構造からいって、19世紀に入ると考えたからである。そして一つには、下限について、

1. 市役所の方々にお願いして、古老とよばれる方に、「皿山窯についての話」を集めていただいたが、全く誰も窯について、何も知らない。

2. 皿山窯の製品らしき磁器を持っている方が皆無である。

という調査結果しかない。となると、新しいとしても現在生活している方の祖父の代より前、まず120年ぐらい前には、既に廃絶していただろう、と考えたのである。比較的新しいのでは？と考えはじめていた時であったので、志水長吉氏の話のうかがいたい、と心が動いた。

早速墓に赴いた。墓が本当に陶工の墓かどうかについては不明である。けれども、子孫だ、という方が出てきたのに、放っておくのは不可ないと思ったのである。墓といえば、墓標があり、歿年・戒名等が彫りこんであるはずである。しかし、その墓は、本報告所収 Fig.21・挿図第13図に見るような、1m四方50cmの高さに石を組みあげただけの、墓だった。歿年その他の彫字は全く無い。

その日、ちょうど松浦市に到着した所氏に志水氏の話をした。「志水さんの話に信憑性があるのかないのか、とにかく聞取りをしよう。」という。「信憑性があれば聞取りも史料的な価値がある」とも。2月24日の所氏による聞取りの結果をまとめると次のとおりである。

1. 志水長吉氏は1907（明治40）年生れの73才である。

2. その墓は長吉氏の4代前の先祖の墓である。と長吉氏は云う。

3. 長吉氏は、子供のころから、父親に、「この墓は自分（長吉氏の父）の祖父の弟の仮り墓だ。だから盆と彼岸には必ず供養をするように」と云われてきた。

4. その墓に葬られている人は、悪太郎川の下流の方で焼きものを焼いていた。と父親に聞かされていた。が焼いていた場所については、父親は知ることが無かった。

以上が概略である。所氏の印象では、志水長吉氏の話は、訥々と思ひだしながら語っていたが、態度からみても、真実を、覚えているとおりに話していると考えてよい、と云う。つまりは信憑性充分だ、とのことだった。この聞取りを図表にして書いていて、可笑しいことに気付いた。「聞取り3」が正しいとすると、墓の主たる陶工は、長吉氏の3代前になる。つまり、長吉氏の「聞取り2」の「4代前」は長吉氏の記憶違いだったことになる。この聞取りには矛盾があることになる。この点について所氏と相談し、私も長吉氏に逢って、話をもう一度訊きたい、と提案した。

所氏は、

「聞取りの内容に矛盾があるのだから、もう一度確かめるのはよい。けれども、再度訊くとなると、どうしても誘導的に質問することになるから、その点に留意するように。また初めの聞取りほどの史料性は無い」とご注意を受けた。

しかし私としては、どうしても訊きたかった。役場の加椎課長にお願いした。その結果、長吉氏の方から、皿山窯をどうしても一目見たいから発掘現場にぜひ行って逢おう、というご返事をいただいた。長吉氏が遺跡に来られたのは3月17日だった。所氏の聞取りの21日後である。予備知識無し of 所氏の聞取りと同じご気分であってくれば、と念じた。長吉氏は一見して、所氏の云われるような、素朴な一老人であった。ゆっくり時間をかけてお話をうかがった。「私（長吉氏）の父の祖父の弟」と話された。そして、やはり「私の4代前」だった。どちらが正しいのか？歯がゆく、つい、

「長吉さんのお父上の祖父上の代だと、長吉さんの3代前ではありませんか？」と訊ねた。長吉氏は首をかしげ、指を折り、「そうなりますか……」と云われた。

この後、発掘が終了して、墓をも発掘させていただくことになった時、調査員の上敷領久君に、また聞取りをしてもらった。その時は、「所氏聞取り」の話について、「じいさん（長吉氏の祖父）から聞いた」と変っていた。このあたりに問題があるのであって、

1. 初めに祖父上に聞いていて、父上からも聞かされていた。

のか。

2. 話の辻褄を合わせたのか。

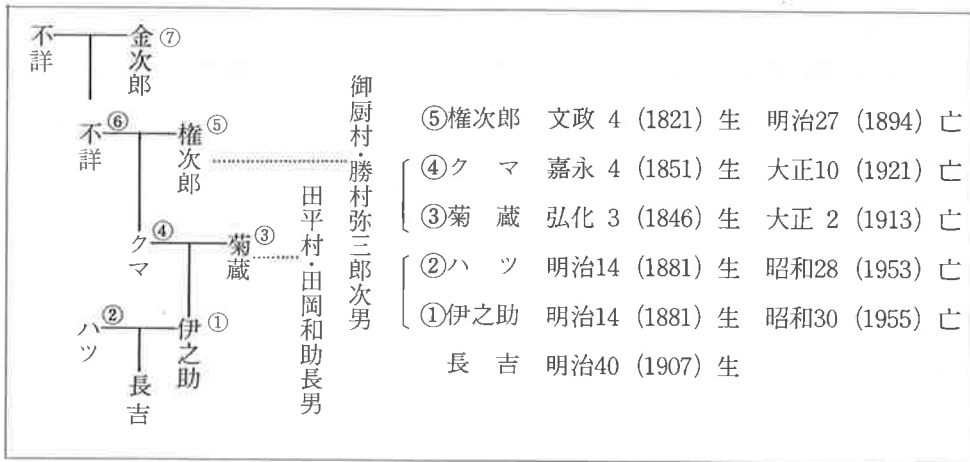
は不明である。しかし、長吉氏の3代前か4代前の方が皿山窯の陶工であった可能性は高いとみてよいだろう。

その確認の方法に「過去帳」を繰るという手段がある。志水家は御厨町の慈光寺の檀家である。そこで、加椎課長に同道をお願いして、慈光寺に、森宏明住職を訪うた。しかし、そこに出示された「過去帳」は、供養の便利のためと、古い「過去帳」がぼろぼろになったためとで、逝去日ごとに整理されていて、当時を知る目的に副わせることは不可能だった。このような、稔りが有るのか無いのか不明な調査方法の繰返しをしているうちの加椎課長・尾崎次長のご協力には非常に感謝している。私どもと一緒に考えてくださっていた。この時も、尾崎次長から、一つのご提案があった。「除籍簿」を調べては如何であろうか、というお考えだった。

松浦市御厨支所に所蔵されている、旧御厨町の「除籍簿」を尾崎次長に調べていただいた。「除籍簿」によれば、明治初年以降に、御厨町内に本籍をもって亡くなった方は、全て判るはずだった。そして、志水家のご先祖を数代前まで、追うことができた。

この家系図を前にして、長吉氏の「父の祖父」と「4代前」を考えてみよう（付図4）。

「父の祖父・権次郎」の弟が陶工であるとする、先代金次郎は、実子（陶工）がいる



付図4 志水家家系・生歿年表

のに養子（権次郎）を迎えたことになる。そういう事態の可能性はある。しかし、文政期の出来事としては不自然である。土地の習俗もあろうかと、尾崎次長に伺った。次長は御厨町の旧家の方である。

「今でもありませんもんね。まして藩政時代にはありません」

と答えてくださった。私を気の毒がったのかもしれない。しかしながら、「3代前（父の祖父）」か「4代前」かを、この系図から読みとろうとするならば、4代前の可能性が、より高いといえるのではなからうか。

志水家の墓所は、志水家住宅の南側と、北西にやや離れたところの2ヶ所にある。北西の墓所が古い墓所であり、旧宅はその古い墓所の西にあったという。新宅を、建直してから、家のすぐ南に新墓所が設けられたのである。この新旧2墓所の墓石を見ると、天明期（1781～1789）以降、よく遺存されている。前掲の「除籍簿」から拵えあげた家系図と、よく符合するのである。そして、長吉氏の3代前の権次郎・その妻がそれぞれ「浄山全道信士」・「浄屋妙清信女」という戒名をもつことが判った。しかし、権次郎が逝去した明治後半期に当たる別の墓標は無い。いっぽう、4代前の金次郎の代の墓石と思われる墓標には、「実岳了道信士（天保14年8月29日）（1843）」と「泰岳良安信士（天保14年9月）（1843）・操屋慈貞信女（万延1）（1860）」の2つが見出された。「3代前・権次郎」の代に比し、先代の「4代前・金次郎」の代は兄弟が多かったと考えられた。実岳了道信士か泰岳良安信士のどちらかが陶工だと明言することは困難である。けれども、陶工が金次郎の弟であろうということを、私は、ほとんど確信したのである。

次いで、もうすこし、4代前・金次郎の弟の青年期を探してみたい。

「除籍簿」から、志水家の嗣子と親の年令差をみてゆくと、当代長吉氏と先代伊之助26才、伊之助と2代前菊蔵（養子）35才、菊蔵と3代前権次郎（養子）25才で、実子・養子にかかわらず25～35才の間にある。もう少し絞ることもできようが、巾をもたせて考える

と、4代前金次郎に比定した陶工の生年は、権次郎の生年の23～33年前と計算できるのである。その時期は1788（天明8）～1798（寛政5）年となる。そう推理してゆくと、陶工が一窯を任されて製陶する期間は、その25～35才ぐらいの男盛りにおくのが自然であり、最も巾を広くとっても、1813（文化10）～1833（天保4）年の20年の間となしうる。このことは、すでに述べた幾つかの方法による操業年代考定とも何ら矛盾しないであろう。

7

熱残留磁気による年代測定は、広岡公夫氏に依頼した。従来、この方法に関しては、専ら渡辺直経先生（帝京大学）にお願いしていたのであるが、今回は、渡辺先生のご推薦により、広岡氏にお出ましいただいたのである。まずは、失礼とは思いながらも東京にお出でをたまわり、一夕、ゆっくりお話をうかがった。私のほうからも、操業時期を寛政～文政（1789～1830）と推測していることを話した。序でになるが、松浦皿山窯の調査では窯の付近に遺存していた大正6年の炭窯と昭和33年の炭窯の2遺構も調査しておいたので、そのことも話したところ、広岡氏が、「近世は、偏角の地域的な差が大きく、特に東西方向にその違いが大きい。そこで、北九州の地域用に補正した永年変化曲線を使って年代の推定を試み」（註12）るが西九州での年代の確実な資料を数多く欲しいと思っていたので、ぜひ、炭窯も試料を採りたい、と云われた。元々、私は、必ずしも理科学的年代測定法の結果を、そのまま信用するということはない。けれども、その結果が正しくなる方向に向かって欲しいとは考えている。そして、その旨を広岡氏に伝えた。広岡氏も、私の考えを諒としてくださり、'82年1月末、松浦皿山窯の現場で再会し、試料を採集していただいた。真北を探る作業から始まる丁寧な採集が終了して松浦の地を去られる日の、「年代のはっきりしている遺構の試料が得られて、たいへん有難い。この試料を使って、とにかく、現在私が用いている方法では、この年代が出たんだ、という報告をする。」とのお言葉が印象的だった。

広岡氏の測定結果は次のとおりである。

皿山窯址 A.D. 1720±50年（1670～1770）

大正窯址 A.D. 1860±150年（1710～2010） 実廃窯時 大正6年（1917）

昭和窯址 A.D. 1880±70年（1810～1950） 実廃窯時 昭和33年（1958）

以上のうち、大正炭窯は、年代を推定するためには、焼けが不充分であったという。大正炭窯は、末永仁作氏（松浦在住）の祖父上が焼いていた窯で、仁作氏が数え年11才の時（大正6年）西山に転居した際廃窯になった。また、昭和窯は、炭焼きをしていた御本人の山田黒平氏（松浦在住）が記憶しておられた。

松浦皿山窯に与えられた年代測定結果は、私の判断と著しく違った。発掘調査に先だつての推定時期の寛政期（1789～1801）よりさらに古く、測定の年代巾100年のうち、最も新しい限界を採っても明和7年（1770）となり、本稿で結論づけた年代とは最少にみても

34年の差が出たのである。広岡氏のご労苦と、誠意ある結果提供に深謝しつつ、ここで肥前磁器窯に関する年代測定結果を、一瞥してみたい。特に、発掘調査者が、どのように、測定結果に対応しているのか、に着目したい。

肥前磁器窯で、理学的年代測定を実施した発掘調査例は、今、手許に8窯例しかない。他にも数例はあろうが、とにかく8例について、発掘調査者の記述を追ってみたい。

1. 長崎県佐世保市江永窯（註13）

C₁₄による年代測定法が坂田武彦氏（九州大学）の手で行なわれた。文献的には、寛文10年（1670）から寛政11年（1799）の間操業されていたとみられる窯であるが測定結果は1700±30年と出ている。調査者の久村貞男氏（長崎県佐世保市教育委員会）は、「文献との比較でも矛盾は見られない。」と、報告書で書いている（註14）が、のちに、『世界陶磁全集8』所収の「江永窯」の中では、「測定結果とは若干のずれがある。」と記している（註15）。この時期で、約70年の食違いが若干であるかどうかは別としても、調査者が、文書による廃絶時期と理学的的方法による廃絶時期に違いがある、とした唯一の例が、この江永窯である。

2. 佐賀県有田町谷窯

報告書が未刊行なので、佐々木達夫氏の概報（註16）によった。年代の考定については、「発掘された窯址の規模や窯道具・製品によって、この窯が江戸時代後期に築造されたことは明らかであるが、広岡公夫富山大学教授が行なった熱残留地磁気法による年代測定の結果によると1860年ごろという廃絶年代が与えられている」と記している。これは全集に所収された概報であるから、この程度の記述になるのは当然だと思う。

3・4. 佐賀県有田町柿右衛門窯A・B窯

川井直人氏（大阪大学）の手で、熱残留磁気による年代測定が行なわれ、B窯1780±30年・A窯1810±30年という結果が出ている。この結果について、発掘者東中川忠美氏（佐賀県教育委員会）は、「発掘調査で確認したB窯跡→A窯跡の築窯順序と矛盾しない」（註17）と第2次調査概報では記すにとどまっているが、第3次調査概報では「これは発掘の結果と矛盾しないが、測定値にかなり誤差が含まれていることを十分考慮しておかなければならない」（註18）としている。この書き方から想像するに、測定年代の誤差の範囲内に、実廃絶年代が入っていると、信じている、とみてよいであろう。

5. 佐賀県嬉野町皿屋谷1号窯

東中川忠美氏により、1・2号窯が発掘調査された。未報告であるので、東中川氏の概報のうち、年代に関する部分を引用する。「1・2号窯跡の関係であるが、製品からみて、2号が1号よりさかのぼると考えられる。床面の残存していた1号窯跡については、熱残留地磁気測定を大阪大学工学部川井直人教授にお願いした。その結果1700±30年の測定値が出されている。この結果と、有田諸窯の製品との比較から2号窯跡は17世

紀後半、1号窯跡は18世紀初頭前後を中心とする時期に位置づけられるであろう』（註19）と述べている。ここでも、熱残留磁気による年代測定結果を、そのまま信用したうえで推論していることがわかる。

6. 佐賀県有田町天狗谷窯（註20）A窯

有田における磁器創始期の窯として知られている窯で、渡辺直経氏の熱残留磁気による年代測定結果1614～1615±12年を評価して、「熱残留磁気による年代測定によると、この窯は17世紀の初期のものとなるのであって、このことは本窯の遺品の年代を考え、あるいは他窯の遺品の年代を推定する際に大きな参考となる」（註21）と述べている。もっとも、この窯は、発掘調査実施より前、すでに、史料・口伝から、元和2年（1616）ごろ開窯といわれていた窯であり、少なくとも文献的方法と理学的方法の一致した例といえるだろう。上の引用の後、さらにA窯廃絶期について考察しておられるが、渡辺氏の測定年代の範囲・慶長8年（1603）～寛永4年（1627）の間に廃絶期がある、という前提のうえで論を組立てておいである（註22）。

7. 同上窯C窯

A窯に比して、C窯の廃絶時期についてはなかなか問題がある。A窯の上に重複してB窯が築かれ、そのまた上にC窯が乗っており、層位的関係からA→B→Cの順に構築されたことは明らかである。しかし、B・C窯の操業時期については、決定することが困難であり、理学的方法を参考にすることも必要であろうし、いっぽう、人文科学的方法も、元来は、根幹にあるべきように思われる。

C窯の年代測定結果は1815±40年、つまり安永4年（1775）～安政2年（1855）と出された。この結果を受けて、といってよいだろう。三上団長は、「18世紀中期後半から後期にかけての時期とすれば、当らずといえど遠からずではなかろうか」（註23）と書いておられる。渡辺年代測定数値の範囲内にC窯の廃絶年代が入っていることを、やはり前提にして細々と年代論を述べておられるのである。

永竹威氏（天狗谷窯調査顧問）も、A・C窯に関し、「渡辺直経氏の研究成果のとおり、A系列の第2層（A窯）、B系列の第2層（C窯）などの窯壁窯床よりテストピースが採取され、熱残留測定という科学的な解明により層位的にA系列、B系列の変遷推移も歴然となり、測定誤差を考慮しながら、『A窯が1603～1627年、C窯が1775～1855年』といったデータが天狗谷古窯址周辺の出土資料の分類考証の基調となったことは、いうまでもない」（註24）と書いておられる。これも理学的年代測定を全面的に信頼している論調である。

このC窯の時期については、地元有田においても、美術史家の間でも、論議を醸し、山下朔郎氏が「有田天狗谷古窯調査報告書を読んで一製作年代判定に異議ありー」の中で、C窯は寛政期（1616～1673）以前だと論じたこともあった（註25）。どちらが正し

いかは不明ということにしておく。けれども私自身が、この天狗谷窯の調査主任を勤めていての感じでは、正しいか否かは別にしても、もうすこし、人文科学優先の思考方向があるのではないかと思うのである。三上団長は同書の末尾で次のように述べるのである。「天狗谷古窯址群とその磁器—総括と結論—」で、「これらの5窯のうちA窯とC窯の廃絶されたときの年代は残留地磁気による年代測定法によってわかっている。」(註26)と。

この熱残留磁気による年代測定をされた渡辺氏は、A・C窯の年代判定に至った過程を次のように報告している(註27)。やゝ長くなるが、所々引用してみる。試料操作のち、年代を推定するにあたり、「結局、設定した永年変化曲線を基にして推定する限り、天狗谷A窯に対しては1614～1615年と1747年、B窯に対しては1574～1592年と1815年のそれぞれ2つの年代が、理論的にとりうる年代として考えられる。」(註28)としている。この数値を表にすると、次のようになる。

A窯(古)		B窯(新)
× 1. 1614～1615	→	1574～1592
2. 1747	→	1815
3. 1614～1615	→	1815
× 4. 1747	→	1574～1592

こう並べてみると、「磁気年代学の立場からすれば、これらの組合せはいずれも対等が可能であって、どれも棄却できる根拠はない。」(註29)。しかし層位的にみて、B窯が古くA窯が新しいということは無いから1と4は棄却するのが当然である。渡辺氏は続けて、「また、考古学的にみて、A窯の製品が様式上、18世紀中葉から19世紀初頭というような新しい年代に到底比定できず、またB窯を19世紀初期と考えることが困難とすると、A窯とB窯の年代の組合せ、1747年と1815年、1614～1615年と1815年もまた受入れられないことになる。……従って、さきにあげたA・B両窯の年代の4つの組合せは、いずれも層位学的あるいは考古学的事実と矛盾し、考えられる組合せは皆無となった。」(註30)という。次いで、「要約」の終り、(6)・(7)を、そのまま写させていただく。「(6)ここに注目すべき事実は、B窯の直上にC窯が存在していることである。C窯産出の磁器は様式の上でA・B窯のものより格段と新しい。B窯の床が、その上に築かれたC窯の使用によって、充分加熱されたと推定して、B窯の年代をC窯の年代と読みかえ、A窯は1614～1615年(上限1603, 下限1627年), C窯は1815年(上限1775, 下限1855年)と判定した。

(7) この結果によると、A窯はわが国における磁器作成の最も初期の窯の一つと考えられる。C窯については、平均年代が19世紀初頭という若い年代に比定されたが、その妥当性について、考古学的見地からの検討を必要とする。」(註31)。

皮肉と云うべきだろうか。理学者側の渡辺氏の方から、我々に対して、人文科学的方法での検討を要請されているのである。そして、我々は、つつい、数字で出てくると、すんなり受入れてしまう危険性があることを反省しなければならないのではあるまいだろうか。

8. 佐賀県有田町天神森窯

三上次男・吉田章一郎両氏を中心になって調査された。本報告書は未刊行であるが、概報が出されている（註32）。年代測定には渡辺直経氏が当っておられる。が、この概報刊行時には、その結果は未だ発表されていなかった。その段階での概報の結論「天神森古窯遺跡の性質」は、こう記している。「筆者（筆者名が無いのでなたかは不明）は古窯相互間の層位的関係・遺物の性質および斜面中における窯位置などの諸点から、古窯相互の年代関係に意をそそいだ。こうした年代関係をさらに確実ならしめるのは、渡辺直経氏によって解明されつつある熱残留磁気による3号・4号・5号・7号・8号の五窯の廃絶年代の測定結果である。

しかし遺憾ながら、いまだ測定結果に接することができないので、これについては本報告に譲ることとする。

そこで、熱残留磁気法による年代測定の結果をしばらくさし置き、ここに窯の築造年代の順序を推定すると次のようになろう』（註33）

しかし、その後、年代については何ら述べる事が無く、

「以上は、現在の段階における推定であって、熱残留磁気による年代測定の結果をもって、この編年は再考されることにもなろう。同時にこれは絶対年代の決定に有力な資料を提供するものと思われる』（註34）

として、最後を、

「おそらく江戸時代前期において磁器の需要が増した時点において稼動をはじめた窯とするのが妥当であろう。この点は隣接する原明古窯址群とも類似の条件下にあると思われる。そうしてこれは熱残留磁気による年代測定の結果がわかると、さらに明らかとなるであろう』（註35）

と結んでいる。

以上8窯の発掘者の記述を総括すると、発掘者は理科学的年代測定の結果に、極めて高い信頼を寄せていることが分かるのである。この伝でいけば、私もまた、松浦皿山窯の廃絶時期を、「いかに新しくみても、明和年間（1764～1772）」としなければならなくなる。そしてこの度の熱残留磁気による年代の方が正しいかもしれない。そのことは正に後考を俟つより仕方が無い。にもかかわらず、前節までに読取った推定作業時期を、今、改めようと思うことは無い。

この節に関しては、引用の箇処が多い。要約して記していくと、私見が混ったり、曲解したりする可能性が高いと考えもしたし、文意の汲みとりが難かしいところもあったので、原文を尊重した。

以上、長崎・松浦皿山窯の操業時期について幾つかの方向から近接して、私見を述べた。しかし、「隔靴搔痒」の感頻りで、何時の日か、近世中・後期の陶磁器研究が進み、正しく書き換えてくださる時と人を得たいと念ずるのである。

文末になって、たいへん失礼であるが、この小考を作るにあたり、直接お教えをいただいた方の氏名を掲げて深い謝意を表する（敬称略）。（駒沢大学文学部教授）

池田 忠一（陶磁研究家）	小池 一之（駒沢大学教授）	前田 好古
池田 伝平	酒井 清治	（長崎県佐々町教育次長）
（陶磁作家日本工芸会会員）	（埼玉県埋文事業団調査員）	松本 建郎
石井 哲	佐々木達夫（金沢大学教授）	（熊本県教委文化課技師）
（長崎県田平町社教主事）	志水 長吉（御厨町）	丸山 雍成
今泉今右衛門	杉山 博（駒沢大学教授）	（九州大学助教授）
（今右衛門窯第13代）	高島 忠平	三上 次男
岡崎 敬（九州大学教授）	（佐賀県教育庁文化課長）	（東京大学名誉教授）
尾崎 寛	所 理喜夫（駒沢大学教授）	宮原九一郎
（長崎県松浦市社教次長）	永竹 威	（佐々町郷土史委員長）
利部 修	（佐賀女子短期大学教授）	森 宏明（御厨町慈光寺）
（立正大学大学院学生）	仲野 泰裕	山口 正憲
加椎 敏郎	（愛知県陶磁資料館学芸員）	（山口産業KK〈製瓦業〉）
（松浦市社教課長）	葉貫 磨哉（駒沢大学教授）	横尾 泰宏
金子 有利（松浦市御厨町）	萩原 博文	（熊本県教委文化課技師）
上敷領 久	（長崎県平戸市教委社教課）	吉田章一郎
（九州大学研究生）	東中川忠美	（青山学院大学教授）
木寺 英一	（佐賀県教育庁文化課）	吉野 正人（御厨町）
（前松浦市教育長）	広岡 公夫（富山大学教授）	渡辺 直経（帝京大学教授）

註

註 1 谷窯の報告書は間もなく刊行される予定と聞くが、佐々木達夫「谷窯」〔『世界陶磁全集 8』（小学館・1978年）〕P.278 によると、焼成室幅 7～7.5 m とあり、佐々木

氏に訊いたところでは僅かに広がっているという。そして調査者吉田章一郎氏に話
いただいたところでは、発掘している段階では、上に行くにしたがって広がっている
という感じは無かったという。つまり、気がつかない程度に上に扇形に広がっている、
ということになる。

- 註2 A. 有田町教育委員会『柿右衛門窯跡発掘調査概報』1977
B. 有田町教育委員会『柿右衛門窯跡第2次発掘調査概報』1978
C. 有田町教育委員会『柿右衛門窯跡第3次発掘調査概報』1979
- 註3 松本建郎「高浜焼窯跡」〔『熊本県文化財調査報告第48集』（熊本県教育委員会・1980）
P.25～36〕
- 註4 横尾泰宏「天草における近世陶磁器」〔註3書・P.39〕および図版13
- 註5 註2に同じ
- 註6 宅間一之編『鹿児焼窯跡』（高知市教育委員会）1981
- 註7 1954年、吉田章一郎と倉田が発掘調査した。未発表であるが、窯の実測図は下記に
掲載してある。本稿の付図4-1は下記からの転載である。
三上次男・吉田章一郎「窯業」〔『日本考古学講座6』河出書房・1956〕P.133
- 註8 吉田章一郎「煉瓦窯址の発掘調査」〔地方史研究所『伊豆河津郷—上河津—』1959〕
P.42・45
- 註9 中須賀三好「城山窯について」〔『田平史談創刊号』（田平町教育委員会）1978〕
P.39～42
- 註10 東中川忠美「調査のまとめ」〔『柿右衛門窯跡第3次発掘調査概報』（有田町教育委
員会・1969）〕P.21
- 註11 高島忠平「柿右衛門窯」〔『世界陶磁全集8』（小学館・1978）〕P.281
- 註12 広岡公夫「皿山古窯と炭窯の考古地磁気測定」（本報告書付篇）P.47
- 註13 久村貞男編『江永古窯』（佐世保市教育委員会・1975）
- 註14 註13書P.47
- 註15 久村貞男「江永窯」〔『世界陶磁全集8』（小学館・1978）〕P.294
- 註16 佐々木達夫「谷窯」〔『世界陶磁全集8』（小学館・1978）〕P.277～278
- 註17 註2-B書P.8
- 註18 註2-C書P.21
- 註19 東中川忠美「皿屋谷1・2号窯」〔『世界陶磁全集』8・1978〕P.294
- 註20 三上次男編『有田天狗谷古窯』（有田町教育委員会・1972）
- 註21 三上次男「天狗谷古窯中より出土した陶磁資料についての考察」（註20書）
P.61
- 註22 註21書P.110～111

- 註23 註21書P.112
- 註24 永竹威「天狗谷古窯址周辺出土資料の考察」註20書 P.123
- 註25 山下朔郎「有田天狗谷古窯調査報告書を読んで―製作年代判定に異議あり―」〔『陶
説』 238号・1973〕 P.23～34
- 註26 三上次男「天狗谷古窯址群とその磁器―総括と結論―」註20書 P.184
- 註27 渡辺直経「天狗谷古窯址の磁気年代学的考察」註20書 P.159～174
- 註28 註27書 P.171
- 註29 註27書 P.171～172
- 註30 註27書 P.172
- 註31 註27書 P.174
- 註32 有田町教育委員会『佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報』有田町教育委員会・
1975
- 註33・34 註32書 P.12
- 註35 註32書 P.13